

遺跡の分布とその立地 ―神奈川県内の旧石器時代遺跡―

脇 幸生 公益財団法人かながわ考古学財団

はじめに

神奈川県は、富士山・箱根山地が属する富士火山帯の東側に位置しています。このため噴火に伴う火山砕屑物（火山岩塊、火山礫、火山灰など）や、裸地からの風によって舞い上げられた火山性の細粒子が堆積した風塵（レス）、いわゆる関東ローム層の堆積が良好です。

この環境条件をもとに構築された石器群変遷指標である「相模野編年」（矢島・鈴木 1976、諏訪間 1988 など）は、精度の高い指標として認知されています。また、これを背景とした様々な研究が行われており、神奈川県は旧石器時代研究において全国的にも屈指のフィールドと言えます。

1. 分布の傾向

神奈川県内では、2010 年時点で旧石器時代遺跡が 456（文化層数 856）あり、縄文時代草創期遺跡 132 を含めると 588（文化層数 984）あります（日本旧石器学会 2010）。

遺跡は、図 1 にあるように山間部を除いた平坦域に展開しています。そして、遺跡の多くは、県中央部を南北に流れる相模川によって形成された相模野台地（相模原市、大和市、座間市、海老名市、綾瀬市、寒川町、藤沢市および茅ヶ崎市の北部、横浜市の一部に広がる河岸段丘）に多くあることが判ります。見つかっている遺跡がどこの水系にあるかを図 2 に示しました。計算の都合上、旧石器時代と縄文草創期を合わせた文化層数 984 を分

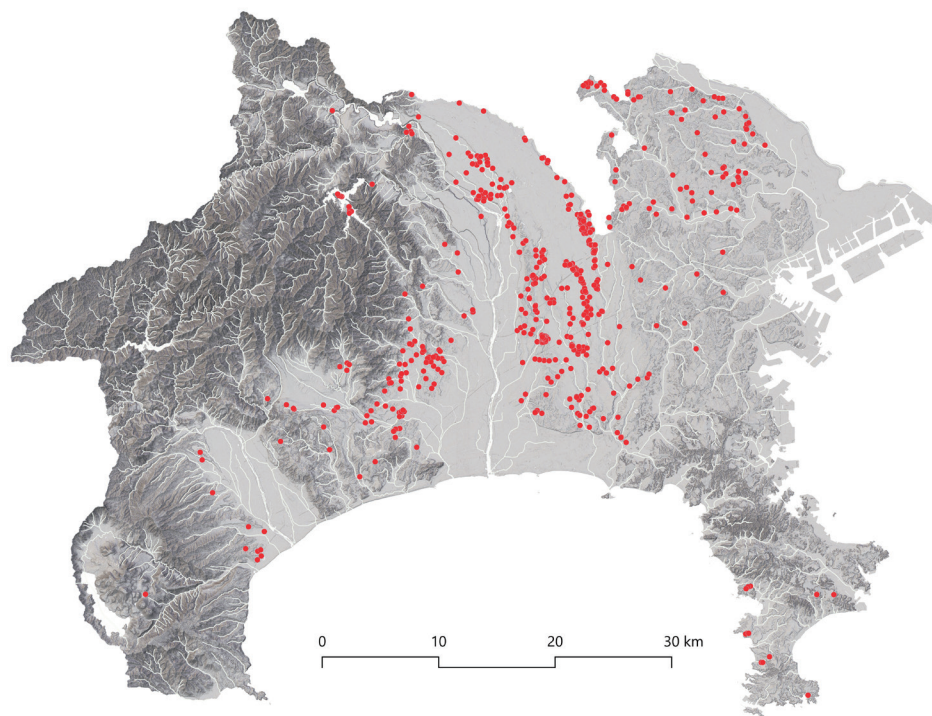


図1 神奈川県における旧石器時代遺跡（S = 1/600,000）（国土地理院基盤地図情報数値標高モデル5mメッシュをもとに作成）

母としました。

最も多いのは相模川水系で 304 文化層（32%）が存在します。次いで境川水系の 239 文化層（25%）、引地川水系の 201 文化層（21%）が続きます。この 3 水系で約 8 割の遺跡を占めることになります。県北東部にある多摩川・鶴見川水系、県西部にある金目川水系との差は明らかです。

各水系内の遺跡は、相模川水系では目久尻川、鳩川、姥川、境川水系では境川、目黒川、引地川水系では引地川、比留川、蓼川などの中小河川に沿った台地・丘陵上の縁辺部に分布しています（小池 2001）。一方、大河川である相模川沿いには多く見られないという特徴があります。

2. 立地の傾向

遺跡は、「過去の人間活動の痕跡が残る場所」と言われています。そこでの活動は、生活に直結していると考えられ、場所の占地・選定には当時の人間の意図が反映されていると推測されます。当時の人々の考えがどのようなものであったかを述べることはできませんが、遺跡が残された場所に関する情報は推測することが出来るので、その

情報をもとに、占地・選定の傾向について探ってみたいと思います。

2-1. 対象・時期

遺跡のデータは、日本旧石器学会が 2010 年に刊行した『日本列島の旧石器時代遺跡－日本旧石器（先土器・岩宿）時代遺跡のデータベース－』（日本旧石器学会 前掲）にある「14 神奈川県」を元に、2019 年までに発見された数遺跡を追加したものを用いました。

遺跡の時期区分は、相模野Ⅴ期編年（矢島・鈴木 前掲）を用い、その中で示された第Ⅲ期・第Ⅳ期・第Ⅴ期を対象としました（図 3）。遺跡の中には、分布調査や地表面採取、他時代遺構からの出土によるものなどが含まれているため、これらは除外しました。また、同一遺跡で 2 つの文化層がある場合は、1 文化層 1 遺跡として扱っています。結果、遺跡数は第Ⅲ期で 62、第Ⅳ期で 149、第Ⅴ期で 113 となりました。

2-2. 分析

分析は、無料のオープンソフトウェアである QGIS を用いて、自然環境要因である地形傾斜度・

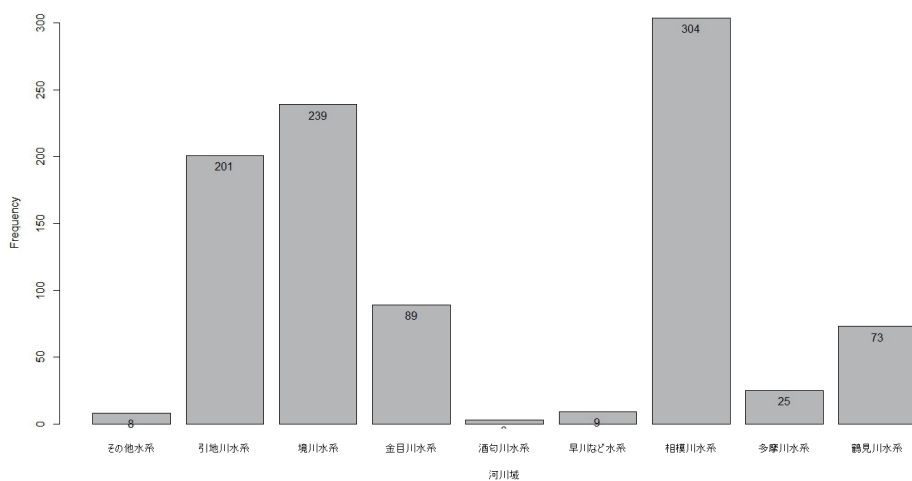


図2 水系ごとの文化層数

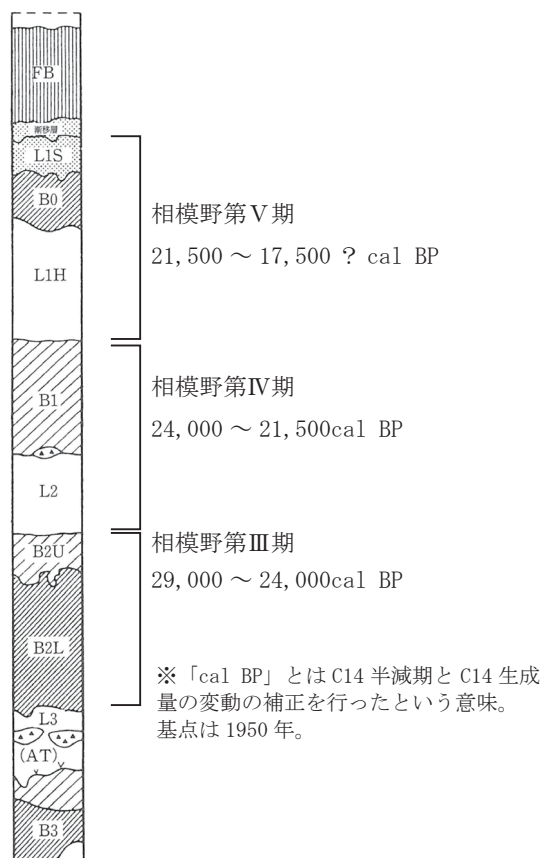


図3 相模野台地ローム層柱状図と相模野編年（Ⅴ期）対応図
C14年代は高屋敷（高屋敷 2024）に拠った。

傾斜方向、河川と遺跡との距離を分析しました。

手順は、まず、国土地理院 5 m メッシュデータから神奈川県域の標高 DEM を作成し、空間解析機能を用いて、地形傾斜度・傾斜方向を計算しました。河川は、国土交通省の国土数値情報を用いました。

2-3. 結果

第Ⅲ期

地形傾斜度は、0 ～ 39 度まで認められ、0 ～ 20 度までにほぼすべての遺跡が入ります。特に 0 ～ 5 度に集中しています。平均値で 4.9 度（標準偏差 6.4 度）となります（図 4）。

傾斜方向は、東が 12 遺跡（19.3%）、西 13 遺跡（20.9%）、南 16 遺跡（25.8%）、北 21 遺跡

（33.8%）でした（図 5）。北向き斜面に多い結果となりました。

河川と遺跡との距離は、最短 28 m ～ 最長 1097 m まで認められ、平均で 345 m（標準偏差 282 m）でした。200 m 以下が最も多く、200 ～ 400 m まで、400 ～ 600 m までが同数となり、600 m 以上になるとその数は減っていきます。1000 m を超える遺跡数は 2 を数えます（図 6）。

第Ⅳ期

地形傾斜度は、0 ～ 32 度まで認められ、0 ～ 20 度までにほぼすべてが収まり、0 ～ 5 度に集中します。この傾向も第Ⅲ期と同じです。平均値で 3.8 度（標準偏差 4.5 度）となります。第Ⅲ期が 4.9 度でしたので、より緩やかな位置に遺跡があったと言えます（図 7）。4 遺跡が計測不可でしたが、この結果には影響しないと考えられます。

傾斜方向は、東が 31 遺跡（21.3%）、西 30 遺跡（20.6%）、南 39 遺跡（26.9%）、北 45 遺跡（31.0%）でした（図 8）。第Ⅲ期と同様な結果が得られました。

河川と遺跡との距離は、最短 20 ～ 最長 1069 m まで認められました。平均で 336 m（標準偏差 249 m）となります。200 m 以下が最も多く、次いで 200 ～ 400 m まで、400 ～ 600 m までがほぼ同数となり、600 m 以上になるとその数は減っていきます。この傾向は、前期と変わりません（図 9）。

第Ⅴ期

地形傾斜度は、20 ～ 30 度に位置する遺跡が少ないながらも現れます。0 ～ 5 度に集中傾向は変わりません。平均値で 5.3 度（標準偏差 7.2 度）となります（図 10）。

傾斜方向は、東が 23 遺跡（22.3%）、西 18 遺跡（17.4%）、南 34 遺跡（33.0%）、北 28 遺跡（27.1%）でした（図 11）。対象とした時期の中で、はじめて南向き斜面に位置する遺跡が一番多い結

果となりました。

河川と遺跡との距離は、最短 20 ～ 1242 m まで認められ、平均で 398 m (標準偏差 322 m) でした。200 m 以下が最も多く、400 ～ 600m まで、200 ～ 400 m までと続きます。600 m 以上になるとその数は減っていきます (図 12)。

2-4. 傾向

各時期の各要因について結果を見てきました。これらから遺跡の立地傾向を考えてみます。

まず、地形傾斜度です。各位時期の傾向から 0 ～ 5 度の場所を選択していたと言えそうです。5 度という角度は、水平方向へ 100 m 進んで約 8.75 m 上がる、8.7% 勾配に該当します。この勾配は、現在バリアフリー設計 (自走の場合) における車椅子用スロープの目安とされ、人間が感じる角度としては緩やかに感じられるそうです。一方、それを超える傾斜角に位置する遺跡も少ないですが存在します。特に 40 度に迫る傾斜角に位置する遺跡が 1 つあります。40 度という傾斜角は、手を使わないと歩行が困難とされている角度ですので、このような場所を当時の人が選んだとは考えられないので、該当遺跡の報告書を見てみました。すると出土した石器群分布と土層堆積傾斜は概ね平坦な堆積を示していました。このことから、当時の地表面は比較的平坦な、角度で言えば 0 ～ 5 度であった可能性が高いと言えます。では、なぜ傾斜角が増したのかという問いが出てきます。その答えとして考えられるのは、地殻の変動または土層傾斜が不均一であったためにローム層より上位にある土層が傾斜したためと考えられます。

次に傾斜方向を見てみます。各方位ともに差はあるものの全ての方位が選択されており、特定の方位に集中する傾向は認められませんでした。第Ⅲ・Ⅳ期で北側斜面に遺跡が多いことはやや驚き

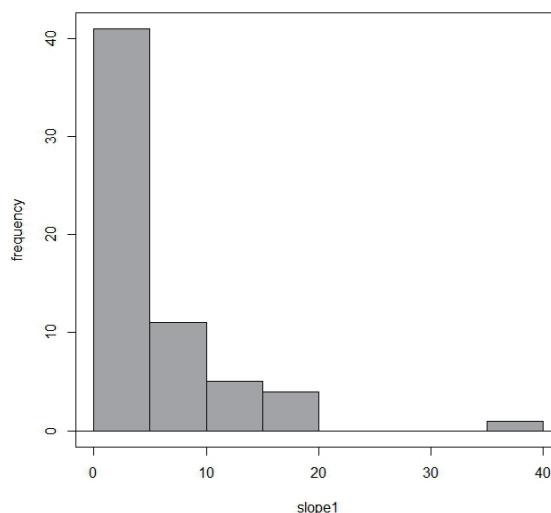


図4 相模野第Ⅲ期 傾斜度

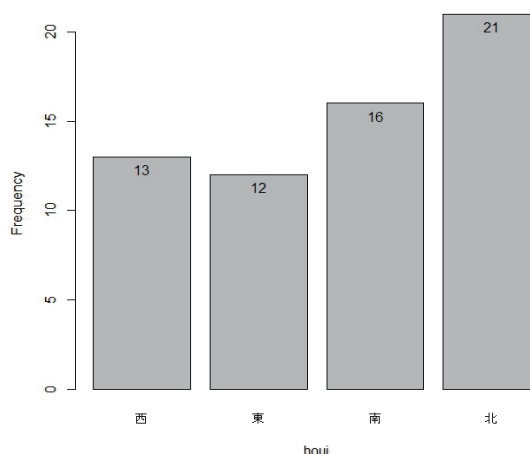


図5 相模野第Ⅲ期 傾斜方位

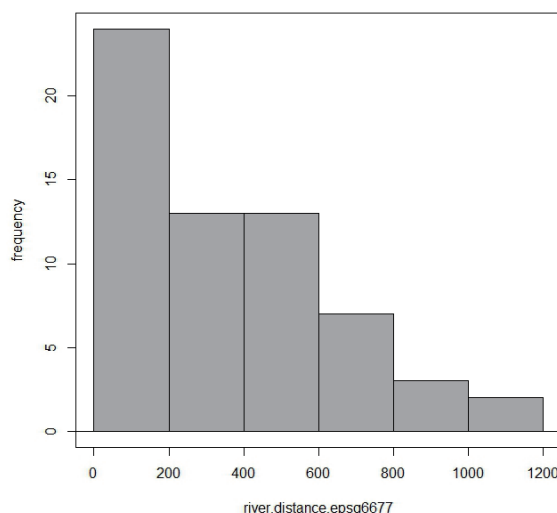


図6 相模野第Ⅲ期 河川と遺跡との距離

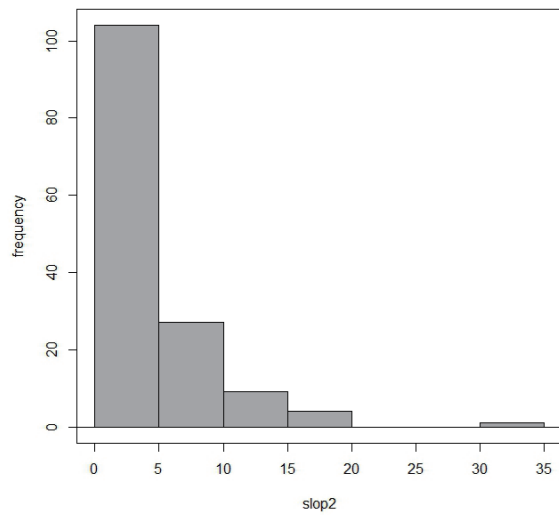


図7 相模野第Ⅳ期 傾斜度

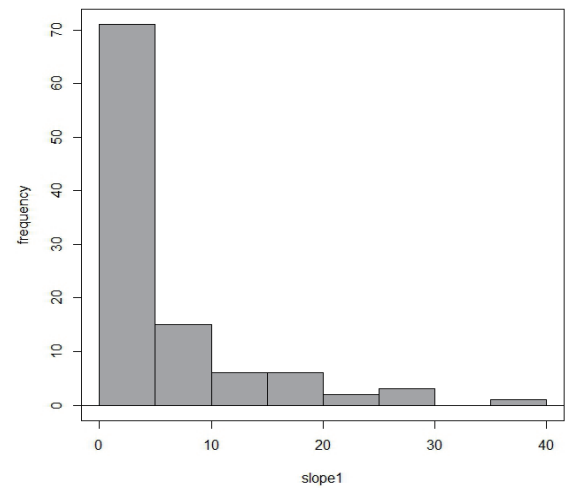


図10 相模野第Ⅴ期 傾斜度

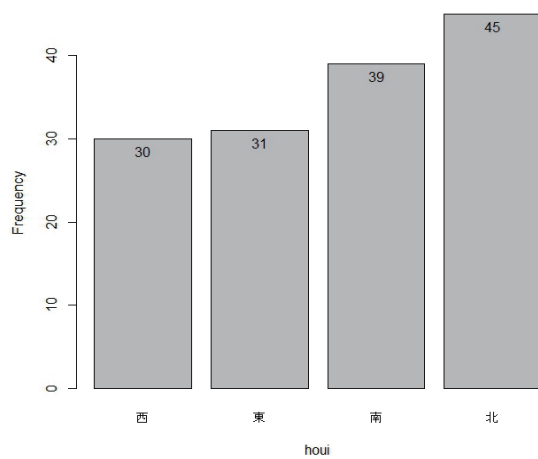


図8 相模野第Ⅳ期 傾斜方位

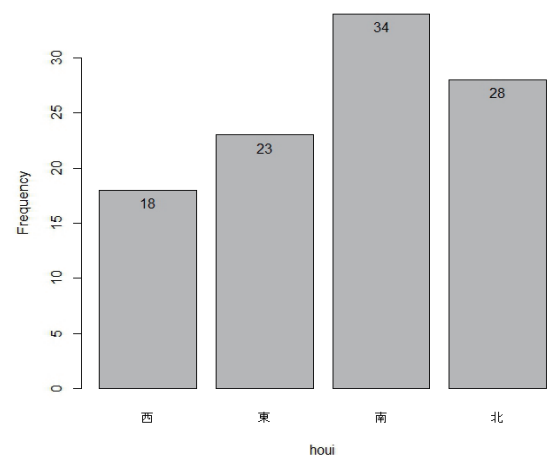


図11 相模野第Ⅴ期 傾斜方位

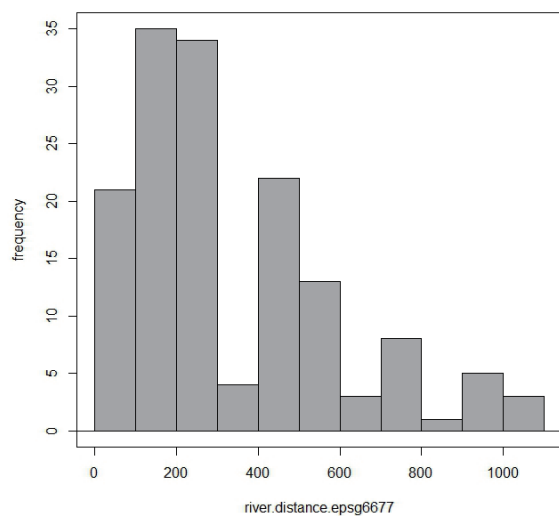


図9 相模野第Ⅳ期 河川と遺跡との距離

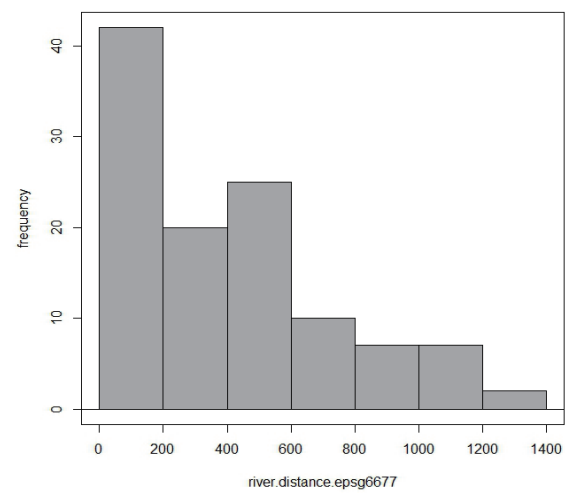


図12 相模野第Ⅴ期 河川と遺跡との距離

でした。「遺跡は日当たりがいい南斜面に占地する」といった言葉を聞いたことがあるかと思いますが、今回の結果では、この傾向を読み取ることは難しく、旧石器時代においては、この言葉は当てはまらないと思われます。

方位にこだわらない理由として、近接する河川の流路方向に合わせて占地したためと考えられます。そこには、当時の人々の営みに合わせた場所であったはずであり、その営みには、日当たりという条件は必要ではなかったのかもしれませんが。

河川と遺跡との距離では、各時期を通して 200 m 以内に多いとの傾向が認められ、距離があるほど遺跡数は少なくなっていくことも共通しています。各時期ともに河川との関りが強かったことがうかがえます。一方で、河川との距離がある遺跡があります。例えば、第Ⅲ～Ⅴ期に亘る藤沢市葛原滝谷遺跡や大和市月見野遺跡群などです。前者は、河川から約 1 km、後者は 500 m ～ 1 km の距離を有しています。地形図を見てみるとこれらの遺跡の近くには現在、河川は見られません。しかし、その周辺には谷状の地形の存在が認められます。例に挙げた月見野遺跡群は、目黒川沿いに展開する著名な遺跡群です。この河川は、今は暗渠となり、地図上に表示されることはないため、暗渠を河川とは認識せず、実際に存在する河川からの離隔測定を行った結果、長い距離が算出されたと考えられます。このように現在表示されないまたは存在しない河川もあります。この他に、「埋没小河川、季節的な水流を持つ河川、野水に、さらに湧泉(湧水点)、地下水に注意する必要がある」(伊藤 2007) との指摘もあり、ソフトで示した結果が当時の遺跡周辺の環境を示している訳ではありません。ソフトを用いる際の留意点と言えるでしょう。周辺環境を見るには、現地での踏査が必要であることは言うまでもありません。

さて、上記をまとめると、遺跡の立地傾向とし

て、①傾斜角が 5 度未満の平坦～緩やかな場所を選び、②傾斜方位に左右されず、③河川から 200 m 以内に占地する傾向があると言えそうです。

3. 立地と遺跡情報

これまでは、3 時期に亘る遺跡立地の全体傾向を見てきました。傾向が同じでも遺跡から出土する遺物点数が異なっていたり、礫群が検出される、されない遺跡など、内容に差があります。ここからは調査によって得られた遺跡データを用いて、遺跡の分布をみてみます。

対象時期は、第Ⅳ期です。第Ⅳ期は、L2 層から B1 層上部までの土層から出土する石器群を指し、前半と後半に区分されています。前半は砂川期と呼ばれ、前半では、硬質細粒凝灰岩やチャートと言った在地石材が用いられます。石器の殆どが「砂川型刃器技法」と呼ばれる石刃技法により作出された剥片を素材として作られており、二側縁加工のナイフ形石器を特徴とします。後半は月見野期と呼ばれ、黒曜石が主要石材となります。石刃技法がみられなくなり、石器の多くが寸詰まりの剥片を素材とします。ナイフ形石器は、幾何学形、涙滴形を呈するようになります(図 13)。

先の項で用いた 149 遺跡から分類不可の 31 遺跡を除いた、前半 59 遺跡、後半 59 遺跡を対象とします。

遺跡から得られたデータのうち、礫群(礫集中や焼礫集中含む)の有無、石器集中部数の項目を用いて分類します。選考理由は以下によります。

礫群の有無は、礫群が調理施設であった地考えられており、調理終了まで 24 ～ 72 時間かかることとされているため(田村 2015)、人々がその場、またはその周辺にいたと考えられます。よって遺跡での滞在を示す指標として用います。

石器集中数は、石器の可視的なまとまりで、1

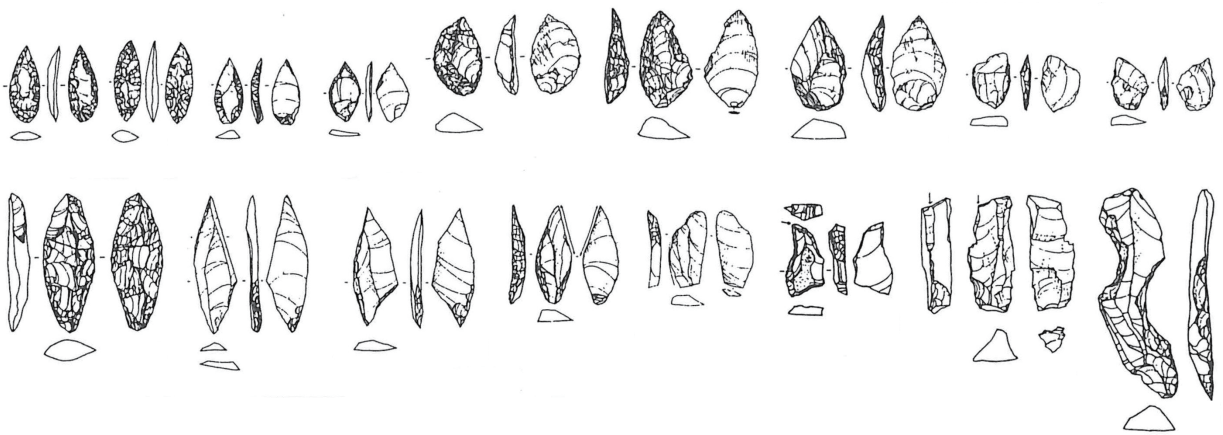


図 13 相模野第Ⅳ期石器（下段：前半、上段：後半）（諏訪間 2019 図2を加工）

つの集中部が1回の行動によって形成されと考えた場合、その場の利用頻度がわかります。当時は周期的な遊動生活をしていたと考えられるので、集中数は同一地点への回帰を示すものと考えられます。また、石器集中数の属性として遺物出土点数を入れています。集中数と出土点数については、第Ⅳ期全体の数量を「データの変化量が比較的大きいところにしき値が設定される方法」（パスコ 2026）である自然分類を用い、集中部数を1-9、10-30、31-56の3つに、出土点数を1-751、752-2608、2609-5950の3つに区分しました。

前半では59遺跡のうち礫群が見つかった遺跡が33（図14）、見つからない遺跡が26となります（図15）。後半では、前者が36（図16）、後者が23となります（図17）。

礫群の有無と集中部との関係をみてみます。礫群がある遺跡では、集中部数31-56を示すものが前半で3、後半で1認められます。一方礫群が見つからない遺跡では、それらは認められません。集中部10-30を示す遺跡では、礫群を有する場合、前半、後半ともに8遺跡あるのに対し、ない遺跡では2遺跡と数を減らします。次に集中部数と出土点数との関係をみてみます。集中部数31-56では、出土点数が752-2608以上となります。

集中部数10-30では、出土点数で3区分した全てがみられますが、出土点数が低区分のものが大勢を占めます。集中部数1-9になると、一部例外はありますが、出土点数が低くなる傾向があります。分布を見てみると、集中部数31-56の遺跡は、前・後半通じて台地中央付近に分布し、前半では、県西部の宮ヶ瀬にも分布が認められます。集中部数10-30の場合、同31-56を示す遺跡から間隔を開けて分布しています。また、この区分の遺跡自身も一定の距離（約5～7km）を保ちながら分布しています。集中部数が1-9を示す遺跡は、台地全体に散っており、近接したり、間隔を置いたりして分布しています。

集中部数31-56の遺跡について、当時の遊動生活の中で、移動に際して交通の要衝、季節的な集会所など特異な機能を持っていたと考えられ、度重なる回帰とそこでの石器製作活動が行われた結果、このような遺跡が形成されたとの考えもあります（砂田 1996）。集中部数10-30の遺跡は、集中部数31-56の遺跡ほどではないにせよ、それに準じた機能を有していたと考えられます。集中部数1-9の遺跡は回帰が少なく、出土遺物点数も少ないということは、そこでの活動が低調であったと考えられます。

礫群の有無、集中部数、そして出土点数を用い

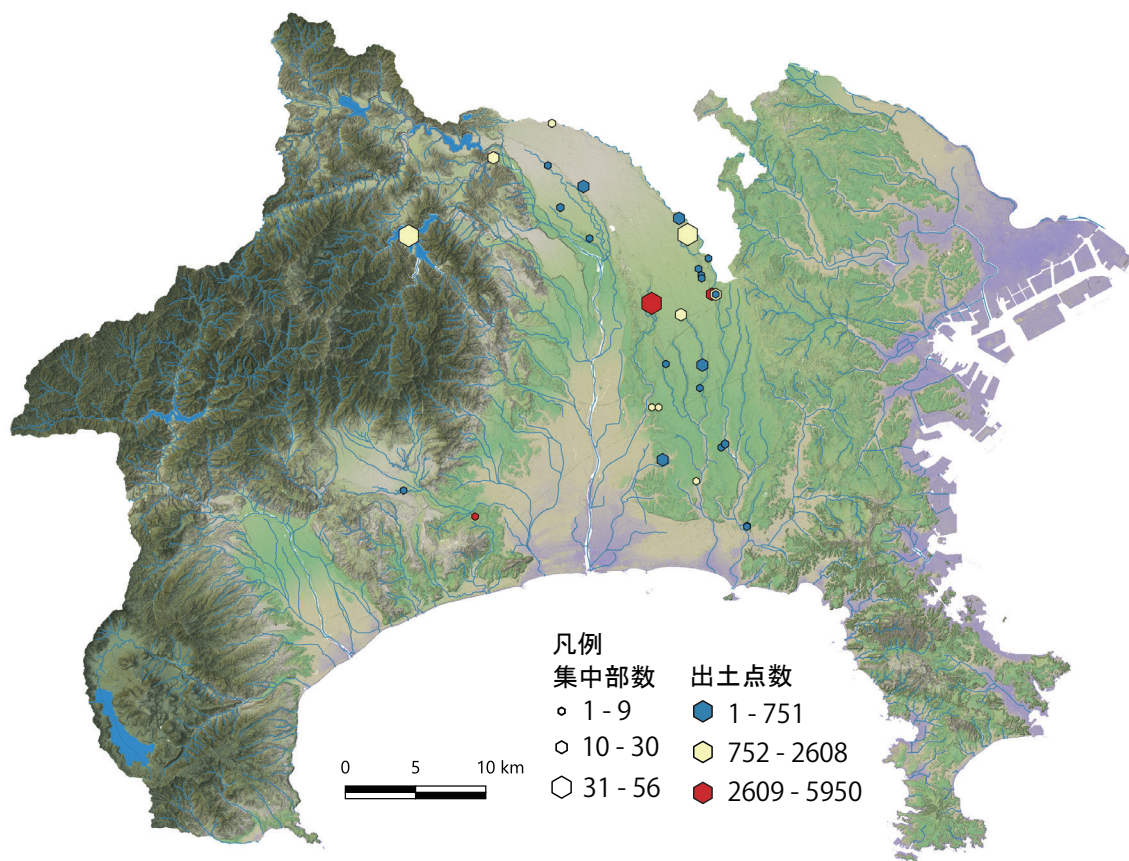


図 14 相模野第Ⅳ期前半 礫群検出遺跡

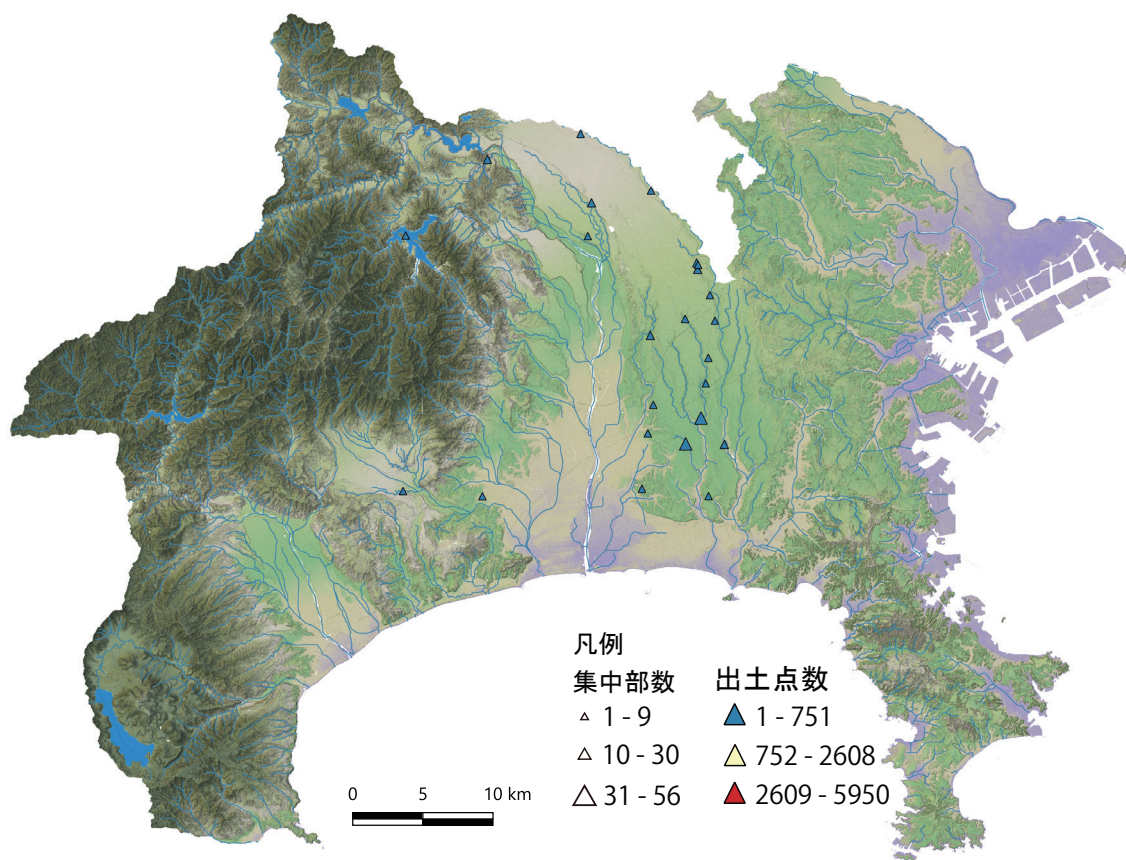


図 15 相模野第Ⅳ期前半 礫群未検出遺跡

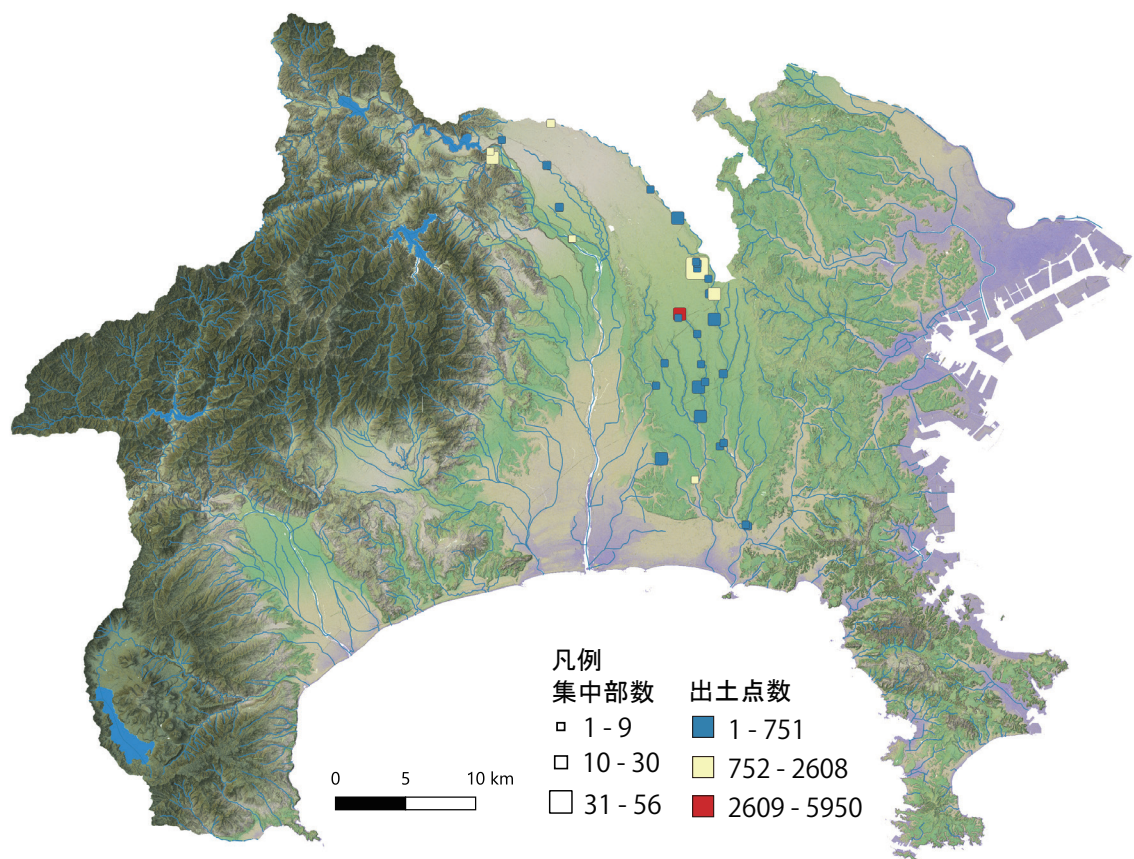


図 16 相模野第Ⅳ期後半 礫群検出遺跡

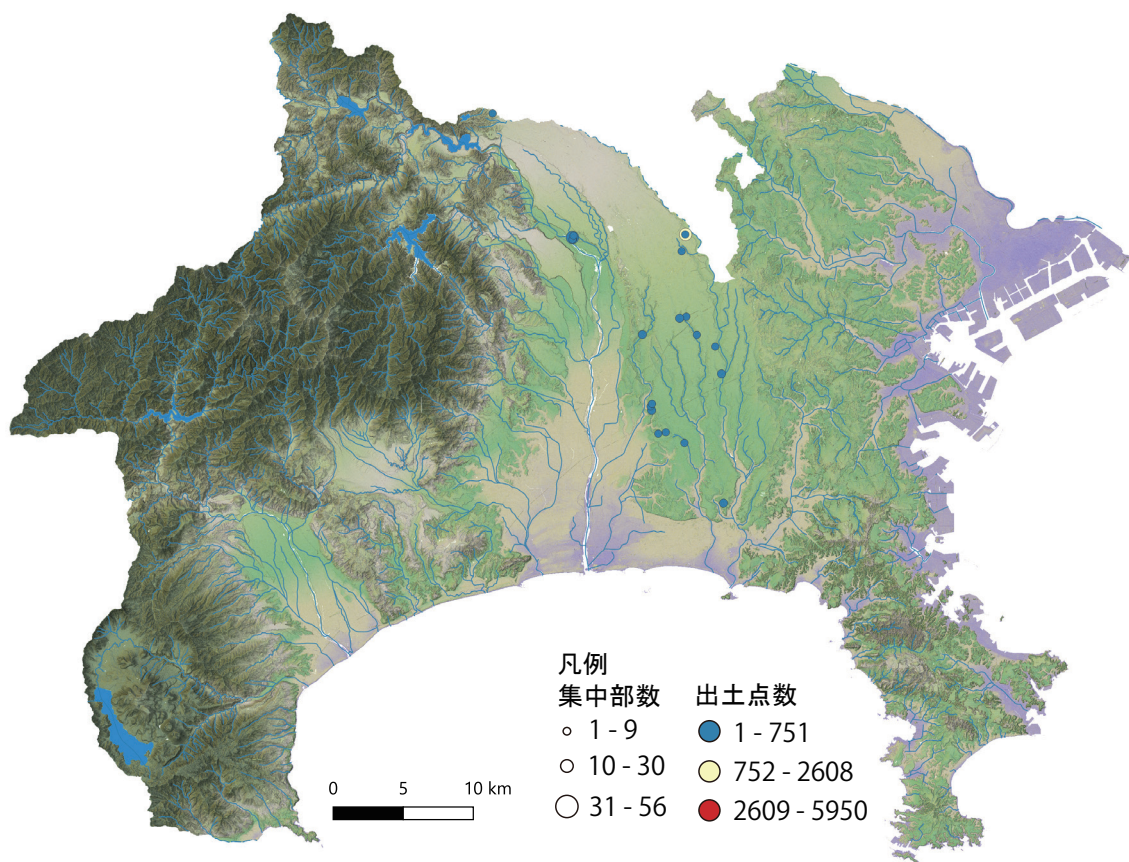


図 17 相模野第Ⅳ期後半 礫群未検出遺跡

て遺跡を分類し、それぞれの関係、分布をみてきましたが、遺跡によって内容や分布が異なっていることがわかるかと思います。この現象は遺跡の役割や機能を示している可能性があります。集中部が多い遺跡は、拠点的な場所であった可能性があります。遺跡を分析し、各遺跡を繋げていくことで、当時の人々の生活や諸活動を復元することができると考えられます。

4. まとめ

相模野編年の第Ⅲ期から第Ⅴ期の遺跡のうち、多くが相模野台地にある小河川沿いに展開してい

ることを示しました。また、立地に関する傾向として GIS ソフトを用い、遺跡の傾斜度、傾斜方向、河川からの距離をみたところ、遺跡は、傾斜度 5 度以内、傾斜方向にこだわりはなく、河川から近い場所に占地する傾向を示しました。そして、遺跡から検出された礫群や集中部数、出土遺物数を基準にした分類を行い、礫群の有無による集中部及び出土点数の違いなどを示し、その違いが分布の違いに現れることを示しました。この違いは、遺跡の役割や機能を示している可能性を指摘しました。

【引用・参考文献】

- 阿子島香 1997 「ドゥフオール岩陰の彼方にー石器群の空間分布と人間活動ー」『歴史』84 東北大学
- 阿子島香 1997 「続・ドゥフオール岩陰の彼方にー岩陰遺跡文化層の構造論的理解ー」『歴史』89 東北大学
- 阿子島香 2008 「ジオアーケオロジーとセトルメントアーケオロジーの接点」『後期旧石器時代の成立と古環境復元』六一書房
- 安蒜政雄 1985 「先土器時代における遺跡の群集的な成り立ちと遺跡群の構造」『論集日本原史』吉川弘文館
- 安蒜政雄 1992 「砂川遺跡における遺跡の形成過程と石器製作の作業体系」『駿台史学』第 86 号 駿台史学会
- 安蒜政雄 1990 『日本村落史講座』第 2 巻景観 1〔原始・古代・中世〕雄山閣出版株式会社
- 石丸恵利子 2023 「縄文時代の狩猟域を解き明かすーイノシシ・ニホンジカはどこで捕獲されたのか？ー」『同位体環境学がえがく世界：2023 版』陀安一郎、申基澈、鷹野真也編集 総合地球環境学研究所
- 伊藤 健 2000 「武蔵野台地南東部」『多摩川流域の段丘地形と考古学的遺跡の立地環境』財団法人とうきゅう環境浄化財団
- 出居 博 1984 「旧石器時代に於ける礫群出現の意義と茂呂系文化への導入に関するノート」『唐沢考古』第 4 号唐沢考古会
- 稲田孝司 1984 「旧石器時代武蔵野台地における石器石材の選択と入手過程」『考古学研究』第 30 巻 4 号
- 大塚健一 2020 「相模野第Ⅲ期ー約 2 万 7 千年前の世界ー」『令和 2 年度公開セミナー 旧石器時代の遺跡立地ー相模野台地を中心にしてー』公益財団法人かながわ考古学財団
- 小野 昭 1978 「分布論」『日本考古学を学ぶ (1) 新版』大塚初重・戸沢充則・佐原真編 有斐閣
- 大泰司紀之 1990 「旧石器遺跡の位置と狩猟獣の季節移動ルートに関する考察」『第四紀研究』29
- 角張純一 1991 「黒曜石原産地遺跡と消費地遺跡のダイナミズムー後期旧石器時代石器群の行動論的理解ー」『先史考古学論集』第 1 集
- 加藤 晋 2013 「西南関東地域における縄文時代の遺跡立地選択」『地理情報システム学会講演論文集 (CD-ROM)』
- 加藤 晋、大槻 久、近藤康久、那須浩郎、本郷一美 2016 「関東地方南西部における縄文人の居住地選択ー自然環境要因の多変量解析ー」『GIS- 理論と応用』24 巻 1 号 一般社団法人地理情報システム学会
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1990 「神奈川県下における主要遺跡の分布とその問題点」『かながわの考古学』第 1 集 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1992 「神奈川県下における集落変遷の分布」『かながわの考古学』第 2 集 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1993 「神奈川県の考古学の問題点とその展望 埋蔵文化財センター開所 10 周年記念」『かながわの考古学』第 3 集 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1994 「神奈川県の考古学の諸問題」『かながわの考古学』第 4 集 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1995 「神奈川県の考古学の諸問題 (Ⅱ)」『かながわの考古学』第 5 集 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 株式会社パスコ 2026 「エリアマーケティング用語集」<https://biz-pasco.jp/help/wordlist/> (参照 2026-8-24)
- 旧石器時代研究プロジェクトチーム 1996～1999 「旧石器時代後半における石器群の諸問題」『研究紀要』1～4 財団法人かながわ考古学財団
- 旧石器時代研究プロジェクトチーム 2000 「旧石器時代後半における石器群の諸問題ー新たなる相模野編年の構築に向けてー」『研究紀要』5 財団法人かながわ考古学財団
- 旧石器時代研究プロジェクトチーム 2001 「旧石器時代後半における石器群の諸問題ー相模野の遺跡間接合からー」『研究紀要』6

財団法人かながわ考古学財団

- 旧石器時代研究プロジェクトチーム 2002～2007 「神奈川県内における旧石器時代の遺構」『研究紀要』7～12 財団法人かながわ考古学財団
- 旧石器時代研究プロジェクトチーム 2008～2015 「神奈川県内における旧石器時代の遺物分布」『研究紀要』13～20 財団法人かながわ考古学財団
- 旧石器時代研究プロジェクトチーム 2016 「神奈川県内における国府系ナイフ形石器の様相」『研究紀要』20 公益財団法人かながわ考古学財団
- 旧石器時代研究プロジェクトチーム 2018 「相模野旧石器研究の現在とこれから」『研究紀要』23 公益財団法人かながわ考古学財団
- 鹿又善隆 2011 「細石刃集団による地点間の活動差」『東北大学研究室紀要』52
- 国武貞克 2000 「武蔵野台地北東部」『多摩川流域の段丘地形と考古学的遺跡の立地環境』財団法人とうきゅう環境浄化財団
- 国武貞克 2004 「石刃技法期の行動パターン」『日本旧石器学会第2回シンポジウム予稿集 石刃技法の展開と石材環境』日本旧石器学会
- 国武貞克 2007 「第7章 石材と行動」『ゼミナール旧石器考古学』佐藤宏之編 同成社
- 国武貞克 2014 「石材の獲得・消費と遺跡群の形成—関東・中部—」『日本旧石器学会第12回講演・研究発表・シンポジウム予稿集石材の獲得・消費と遺跡群の形成』日本旧石器学会
- 木村淳一 2015 「遺跡形成論からみた調査済み遺跡の観察について—青森市高間(6)遺跡の事例から—」『金沢大学考古学紀要』36
- 工藤雄一郎 2005 「本州島東半部における更新世終末期の考古学編年と環境史との時間的対応関係」『第四紀研究』第44巻第1号
- 工藤雄一郎 2010 「旧石器時代研究における年代・古環境論」『講座日本の考古学1 旧石器時代(上)』青木書店
- 工藤雄一郎 2012 「旧石器・縄文時代の環境文化史：高精度放射性炭素年代測定と考古学」新泉社
- 栗島義明 1986 「先土器時代遺跡の構造論的研究序説」『土曜考古』第11号 土曜考古研究会
- 栗島義明 1987 「先土器時代遺跡の研究—個体の消費及び石器の交換・譲渡からみた砂川遺跡形成の背景—」『考古学研究』第34巻第3号 考古学研究会
- 久保純子 1988 「相模野台地・武蔵野台地を刻む谷の地形—風声テフラを供給された名残川の谷地形—」『地理学評論』第61巻 日本地理学会
- 久保純子 2008 「関東平野南部の地形発達史」『岩宿フォーラム 2008/シンポジウム 更新世の地形発達史と遺跡群の形成』岩宿博物館
- 小池 聡 2001 「相模野台地の立地と文化層」『相模野旧石器編年の到達点』神奈川県考古学会
- 桜井準也 2007 「景観と認知」『ゼミナール旧石器考古学』佐藤宏之編 同成社
- 桜井準也 1989 「遺跡立地と河川次数分析」『考古学の世界』慶応大学民族学考古学研究室
- 柴田 徹 2004 「田名向原遺跡Ⅰで出土した石材について」『田名向原遺跡Ⅱ』相模原市埋蔵文化財調査報告31 相模原市教育委員会・田名向原遺跡研究会
- 島田和高 1994 「両面調整槍先形尖頭器の製作と原料消費の構成」『旧石器考古学』49 旧石器文化談話会
- 島田和高 1998 「中部日本南部における旧石器地域社会の—様相—砂川期における地区の成り立ちと地域の構造—」『駿台史学』第102号
- 島田和高 2015 「上部旧石器時代における中部高地黒曜石原産地の土地利用変化」『第四紀研究』54(5) 第四紀学会
- 島田和高 2019 「石器石材の運搬ネットワーク」『宿フォーラム 2019/講演会・シンポジウム岩宿時代と日本列島の旧石器時代研究』岩宿博物館
- 清水芳裕 1985 「自然地形の変化と遺跡の形成過程」第四紀研究24(3)
- 白石浩之 1992 「旧石器時代後期から縄文時代草創期の集落」『かながわの考古学』第2集神奈川県立埋蔵文化財センター
- 砂田佳弘 1996 「遺跡群の形成」『石器文化研究』5
- 砂田佳弘 2001 「尖頭器文化～細石刃文化の様相」『相模野旧石器編年の到達点』神奈川県考古学会
- 鈴木次郎・矢島國雄 2000 「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ(1)(新版)』大塚初重・戸沢充則・佐原眞編 有斐閣
- 鈴木忠司 1983 「日本細石刃文化の地理的背景—先土器時代遺跡論の試み—」『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』(財)古代学古代学協会
- 鈴木忠司 1985 「再論 日本細石刃文化の地理的背景—正業論への視点—」『論集日本原史』吉川弘文館
- 鈴木忠司 2006 「岩宿時代の水と川をめぐる立地論」『朱雀』第18集 京都文化博物館
- 鈴木忠司 2010 「旧石器時代遺跡の立地」『講座日本の考古学1 旧石器時代(上)』青木書店
- 鈴木忠司 2019 「砂川遺跡のブロックと礫群」『シンポジウム 砂川遺跡—旧石器時代研究の過去・現在・未来—』予稿集 明治大学黒曜石研究センター
- 諏訪間順・堤 隆 1985 「神奈川県大和市深見諏訪山遺跡Ⅳ文化層の石器群について」『旧石器考古学』30
- 諏訪間順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について—層位的出土例の検討による石器群の段階的把握—」『神奈川考古』24 神奈川考古同人会
- 諏訪間順 2001 「相模野編年の到達点」『相模野旧石器編年の到達点』神奈川県考古学会
- 諏訪間順 諏訪間 順 2019 『相模野台地の旧石器考古学』新泉社
- 諏訪間順・野口 淳・島立 桂 2010 「四 関東地方南部」『講座日本の考古学1 旧石器時代(上)』青木書店

- 相馬寛吉・辻誠一郎 1988 「植物かせきからみた日本の第四紀」『第四紀研究』第26巻第3号
- 高屋敷飛鳥 2019a 「相模野台地における砂川石器群の技術構造と居住形態」『日本旧石器学会第17回研究発表・シンポジウム 予稿集 旧石器研究の理論と方法論の新展開』日本旧石器学会
- 高屋敷飛鳥 2019b 「相模野台地における砂川期」『シンポジウム 砂川遺跡—旧石器時代研究の過去・現在・未来—』予稿集 明治大学黒耀石研究センター
- 高屋敷飛鳥 2024 「放射性炭素年代からみた相模野編年の現在」『神奈川考古』第60号
- 田村 隆 1992a 「石材についての諸問題—特に関東地方の石材採取戦略について」『考古学ジャーナル』No. 345 ニュー・サイエンス社
- 田村 隆 1992b 「遠い山・黒い石—武蔵野Ⅱ期石器群の社会生態学的一考察—」『先史考古学論集』第2集
- 田村 隆 2015 「礫群の形成、特に閉鎖式ピット・オープンについて」『研究連絡誌』第76号 公益財団法人千葉県教育振興財団文化財センター
- 堤 隆 2011 「細石刃狩猟民の黒曜石資源需給と石材・技術運用」『資源環境と人類』第1号 明治大学黒耀石研究センター紀要
- 長崎潤一 2001 「日本旧石器時代の社会と集団—遺跡間接合の景観考古学—」『現代の考古学6 村落と社会の考古学』朝倉書店
- 仲田大人 2002 「後期旧石器時代の人口推定—居住形態にもとづくシミュレーション—」『MICROBLADE』第2号 ハケ岳研究グループ
- 仲田大人 2013 「細石刃石器群と文化伝達、人口」『シンポジウム 日本列島における細石刃石器群の起源』ハケ岳研究グループ
- 西井幸雄 2000 「武蔵野台地北西部」『多摩川流域の段丘地形と考古学的遺跡の立地環境』財団法人とうきゅう環境浄化財団
- 野口 淳 1995 「武蔵野台地Ⅳ下・Ⅴ上層段階の遺跡群—石器製作の工程配置と連鎖の体系—」『旧石器考古学』51 旧石器文化談話会
- 野口 淳 2004 「石刃技法期の遺跡構造—「砂川期」石器群の遺跡構成と形成過程」『日本旧石器学会第2回シンポジウム予稿集 石刃技法の展開と石材環境』日本旧石器学会
- 野口 淳 2005 「旧石器時代遺跡研究の枠組み—いわゆる「遺跡構造論」の解体と再構築—」『旧石器研究』第1号 日本旧石器学会
- 野口 淳 2007 「遺跡の空間分析」『ゼミナール旧石器考古学』佐藤宏之編 同成社
- 野口 淳 2008 「武蔵野台地の地形発達史と遺跡群—多摩川への視点—」『岩宿フォーラム 2008/ シンポジウム 更新世の地形発達史と遺跡群の形成』岩宿博物館
- 野口 淳・林 和広 2008 「武蔵野台地立川面における後期旧石器時代遺跡形成のモデル—野川～多摩川間の地形形成と後期旧石器時代の動態—」『後期旧石器時代の成立と古環境復元』六書房
- 畠中俊明 2013 「石器石材からせまる—相模野台地における旧石器時代遺跡の事例から—」『考えよう！旧石器時代のライフスタイル—人とモノの移動から探る旧石器時代の生活—』公益財団法人かながわ考古学財団
- 羽生淳子 1990 「縄文時代の集落研究と狩猟・採集民研究との接点」『物質文化』53
- 羽生淳子 1994 「狩猟・採集民の生業・集落と民族誌—生態学的アプローチに基づいた民族誌モデルを中心として—」『考古学研究』第41巻第1号
- 羽生淳子 2000 「縄文時代の定住度（上・下）」『古代文化』第52巻第2・4号 財団法人古代学協会
- 羽生淳子 2005 「セトルメント・アーケオロジ—とその発展」『考古学ジャーナル』No. 529 ニュー・サイエンス社
- 羽生淳子 2009 「季節的定住と通年定住—民族誌事例の検討から—」『縄文時代の考古学8 生活空間—集落と遺跡群—』同成社
- 樋口忠彦 1975 『景観の構造 ランドスケープとしての日本の空間』技報堂出版株式会社
- 比田井民子 2000 「武蔵野台地南西部～野川を中心とする多摩川水系の遺跡～」『多摩川流域の段丘地形と考古学的遺跡の立地環境』財団法人とうきゅう環境浄化財団
- 比田井民子 2019 「旧石器時代の地形と遺跡の立地」『岩宿フォーラム 2019 / 講演会・シンポジウム岩宿時代と日本列島の旧石器時代研究』岩宿博物館
- 比田井民子 2005 「旧石器時代における丘陵遺跡の立地と選地に関わる試論」『地域と文化の考古学』I 明治大学文学部考古学研究室
- 三瓶裕司 2020 「相模野第Ⅴ期—約1万9千年前の世界—」『令和2年度公開セミナー 旧石器時代の遺跡立地—相模野台地を中心に—』公益財団法人かながわ考古学財団
- 宮塚義人・矢島國雄・鈴木次郎 1974 「神奈川県本蓼川遺跡の石器群について」『史館』3号
- 山地雄大・太田千裕・藤山龍造 2019 「石材構成に見る「砂川期」の移動形態」『シンポジウム 砂川遺跡—旧石器時代研究の過去・現在・未来—』予稿集 明治大学黒耀石研究センター
- 山田昌功 2012 「石材産地研究にかんするノート」『資源環境と人類』第2号 明治大学黒耀石研究センター紀要
- 山田しょう 2019 「旧石器人の生活と社会」『岩宿フォーラム 2019 / 講演会・シンポジウム岩宿時代と日本列島の旧石器時代研究』岩宿博物館
- 矢島國雄・鈴木次郎 1976 「相模野台地における先石器時代研究の現状」『神奈川考古』1 神奈川考古同人会
- 矢島國雄 1996 『綾瀬市史9 別編 考古』綾瀬市
- 吉田政行 2010 「遺跡間接合資料に見る旧石器人の活動痕跡」『比較考古学の新天地』同成社
- 脇 幸生 2020 「相模野第Ⅴ期—約2万2千年前の世界—」『令和2年度公開セミナー 旧石器時代の遺跡立地—相模野台地を中心に—』公益財団法人かながわ考古学財団
- ArcGIS 2026 「分類方法」ArcGIS for Excel <https://doc.arcgis.com/ja/excel/latest/workflows/classification-methods.htm> (参照 2026-8-24)